

小噺・落語入門サロン

■前座 (今日の話題・話のネタ)



落語歳時記シリーズ

師走 (12月) の落語 「一目上り」

八五郎が、ご隠居の家の床の間の掛け軸に目を止め。これは狩野探幽の絵で雪折り笹、『しなはるる だけは堪(こら)へよ 雪の竹』という句を付けた芭蕉の讀だと教えられる。こういうものを見たときは「けっこうなな讀です」とほめるよう教えられた。

次に大家さんのところに行く。「大家さん掛け物あるか。それをほめる」大家が見せたのが『近江きんこうの 鶯は見がたく 遠樹(えんじゆ)の鳥からすは見やすし』「これは結構なサン」とほめると、「これは根岸鵬斎(ねぎしほうさい)の詩(シ)だと言われて退散。今度はお医者の先生のところへ。

「掛け軸を見せてくれ」と頼むと、先生が出したのが『仏は法を売り、末世(まっせ)の僧は祖師を売る。なんじ五尺の身体を売って、一切衆生(いっさいしゅじょう)の煩惱(ぼんのう)を安んず、柳は緑花は紅のいろいろか、池の面に月は夜な夜な通えども、水も濁さず、影も宿らず』という長ったらしいもの。

「南無阿弥陀仏」「まぜっ返しちゃいけない」「こいつはけっこうな シ だ」

「いや、これは一休の悟り悟(ゴ)だ」「サイナラッ」と逃げ出す。

「ばかばかしい。ひとつずつ上がっていきやがる。三から四、五だから今度は六だな」と検討をつけ、竹の家へ。なにか大きな船に大勢乗っている絵。「この上のは能書きか」「能書きってやつがあるか。上から読んでも下から読んでも同じ・回文だ。」

『なかきよの とおのねむりの みなめさめ なみのりふねの おとのよきかな』

「わかった。こいつは六だな」

「ばかいえ。七福神の宝船だ」

■二つ目 (小咄の稽古)

映像や音声から学ぶ、小ばなしのコツ・つぼ

「プロに学ぶ小噺の話し方」落語の時間 “一分茶番 (権助芝居)”
その後、皆さん的小ばなし披露とアドバイス

■大喜利

今回も **謎かけ** で、お題は「冬至」「熊」

次回は 2026年1月5日 (月)

次回のなぞかけのお題は「馬(午)」「カレンダー(暦)」